様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４７３

研究課題名（和文）ヌートカ語における統語構造の特性―節と節結合の連関の中で

研究課題名（英文）Characteristics of Nuuchahnulth syntax in relation to clause and clause combining

研究代表者
中山　俊秀（Nakayama, Toshihide）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：７０３３４４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、カナダの先住民言語であるヌートカ語における文形成上の特性を、「節」と複数の節からなる「節結合」に焦点を当てて明らかにした。
ヌートカ語では、英語で前置詞句、副詞句、名詞句など要素で表現される内容が別の節として表され、表現全体は節連結の形をとる。つまり、英語では単一の節として表現しうる内容がヌートカ語では節結合によって表現されざるをえないことが多い。これはヌートカ語の品詞分類が細分化されていないことと関係していると思われる。文形成法研究の中ではしばしば節が中核的構造として位置づけられるが、この研究を通して、そうした前提は通言語的に必ずしも有効ではないことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study examined the characteristics of syntactic organization of Nuuchahnulth, an endangered indigenous language of Canada, with a focus on the structural domains of clause and clause combining. A clause in Nuuchahnulth is very limited in its internal structure. Many of meanings that could be expressed within a clause using a various phrases (prepositional, adverbial, or nominal) in English must be expressed with clause combining in Nuuchahnulth. This difference in encodability seems to be related to the fact that the lexical category distinction is much less developed in Nuuchahnulth. The clause is often assumed to be universally at the center of syntactic organization. The findings in this study, however, show that it is not always the case, and that the role of the clause in syntax depends on the structural type of the language.

研究分野：言語学、用法基盤言語学

キーワード：ヌートカ語　危機言語　節連結　統語論

1. 研究開始当初の背景

現代の統語構造の研究では、節が構造形成における中心的なドメインとして位置づけられている。述語とその直接項を中心とした構造的なまとまりである「節」は、さまざまな形態統語的なパターン・規則が作用するドメインであり、「文法的に完結した(grammatically complete)」構造を作りうる最小のドメインということにおいても注目され、統語構造の分析やモデル化の上で中核的構造単位として位置づけられてきた。また、異なった言語において同様の形式的基準（述語とその直接項を中心としたまとまり）で「節」を取り出すことができるという事実に基づいて、異なった言語における節の構造的性質を統一的な理論的枠組みによって捉えることができると考える傾向が強い。しかし、あまり広く研究されていない言語を見てみると必ずしもそうした「常識」が当てはまらないことがある。本研究の対象とするヌートカ語もそうした言語の一つである。ヌートカ語はカナダ、ブリティッシュコロンビア州で話される消滅危惧言語で、複統合的語形成や不明瞭な品詞分類など、これまでの統語理論研究が主として扱ってきたヨーロッパの大言語とは大きく異なる形態統語的性質を持っている。

形式面からは同じく定義できそうな構造的単位でも、言語によってその性質や機能が異なりうるとすると、その通言語的差異の幅と性質を見極めることが重要な課題となってくる。特に、それが「節」のように統語研究上重要な位置づけを与えられている単位・ドメインに関わるとすれば、ことさらである。また、節レベルでの構造的制約が節結合レベルでの表現に影響を与えるという事実を踏まえると、「節」や「節結合」といった統語ドメインを個別に分析したり通言語的に比較したりする従来のアプローチに対する疑問も持たれる。

こうした問題意識のもと、本研究では、ヌートカ語の「節」と「節結合」の構造的性質を精査することを通じて、「節」と「節結合」の統語構造形成上の役割と関係性の研究を進めると同時に、ヌートカ語の統語体系の特性に合った記述枠組みを探求することとした。

この研究は、これまで研究代表者が行ってきた形態統語法に関する類型論的諸研究の中で得られた知見と、ヌートカ語の談話データに基づく文法研究の中で得られた問題意識とを踏まえて着想された。

2. 研究の目的

本研究では、カナダの先住民言語であるヌートカ語における統語体系の特性について、「節」と「節結合」に焦点をあて、以下を明らかにする。

(1) ヌートカ語における「節」と「節結合」の内部構造、意味機能、談話の中での分布などからその特性を精査する。

(a) 節の構造的特性の精査とタイプ分け

節構造については、述語とその直接項との関係を軸とした項構造の観点から分類を試みる。

(b) 節結合の構造的特性の精査とタイプ分け

節結合構造については、結合される節を、結合順、節に付加できる接辞、構造的な関係（並立・従属など）を軸とした構造的性質の観点からタイプ分けし、ヌートカ語文法の中での節結合の多様性の幅を明確にする。また、節結合が使われる文構造の中での位置、談話の中での位置、使用頻度、意味機能など、言語表現の中での分布や使われ方の観点からのタイプ分けを行い、構造的特性と使用・機能上の特性との相関を探る。

(2) 「節」と「節結合」の統語構造形成上の役割と関係性についての研究

(a) ヌートカ語における「節」と「節連結」の関係（構造的、意味的）と英語における「節」と「節連結」の関係の違いの精査。

(b) 「節」と「節連結」の間のオーバーラップ（論理的に同等の意味が節と節結合とで表現できるケース）における意味機能的差異の精査―節と節結合の意味機能上の役割分担を理解する手がかりが得られることが期待される。

(3) ヌートカ語の統語体系（「節」と「節結合」を含む）を統合的に記述する枠組みを探る。

3. 研究の方法

本研究を進める上で重要な基盤となるのは研究代表者・分担者がこれまでに収集・分析・資源化してきたヌートカ語のテキスト資料、文データ、語彙であるが、網羅的なデータ基盤をつくるために現地調査により追加のデータ・情報を収集する。用例はテキスト資料から抽出し、構造特性および意味機能特性情報を付加したデータベースとしてまとめ、理論的研究のための中核的リソースとする。

4. 研究成果

ヌートカ語の節および節結合の特性と節―節結合の関係性について、データベースに基づき、節および節結合のタイプ分け、自然談話と作例における違い、談話ジャンル間の違い、節と節結合の構文選択に特に焦点を当て、そのパターンの研究をまとめた。自然談話資料を中心的なデータベースとして用いることで、作例などに基づく聞き取り調査資料ばかりを基盤としたアプローチの弱点（構造上の特性の確認はできても意味機能の分析は十分にできない）を避けることができた。

この研究では、節・節結合といった構造形成ドメインを個別に捉えるのではなく、それらのドメイン間の連続性・相互関係性を強く意識した上で、節および節結合の構造と機能を統語体系の中に位置づけた。その視点は従来の統語法研究で欠けていた部分を補うものである。

ヌートカ語において観察された節および節結合の特性と節―節結合の関係性について、英語におけるそれと対比させ、文法体系における節と節結合の位置づけに関する理論的考察を深めると共に、そうした統語構造上の違いが他の

文法的特性とどのように連動しているかを考察した。英語では節の中での文法的な役割・位置づけが細分化され品詞として文法化されている。そのため、一つの品詞の中に多くの意味要素を詰め込むことができる。一方、ヌートカ語では品詞の構造的差異が発達しておらず、そのため英語では副詞句のような要素で表現される内容は節として表され、表現全体は節連結の形をとる。これは、ヌートカ語における品詞分類の特性と連動しているようである。このように、どのような内容が節もしくは節連結として表現されるのかは、言語の構造タイプによって異なることがわかった。ここから、構造ドメインとしての「節」や「節連結」の特性を言語タイプの違いを考慮することなく画一的に考えることは適切でなく、統語構造モデル化の基盤をもっぱら節におくことの正当性も再考する必要があるという結論に至り、さらに節と節連結の間の流動性を踏まえた新たな理論化の方向性を得ることができた。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1. Toshihide Nakayama. 2017. "Polysynthesis in Nuuchahnulth, A Wakashan Language." In: Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.) The Oxford Handbook of Polysynthesis. Oxford: Oxford University Press. 603-622. 査読無
2. 中山俊秀. 2017.「言語知識はどのような形をしているのか」日本認知言語学会論文集 18. 査読有
3. 大野剛,中山俊秀. 2017.「文法システム再考：話しことばに基づく文法研究に向けて」鈴木亮子,秦かおり,横森大輔（編）『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦』東京：ひつじ書房. 5-34. 査読無

〔学会発表〕（計 21 件）

1. Fumino Horiuchi & Toshihide Nakayama. 2017. “Systematicity in variation within a grammar: A look into ‘broken’ structure and ‘deviant’ semantics in Japanese conversation.” 15th International Pragmatics Conference. Belfast, Northern Ireland.
2. Toshihide Nakayama. 2017. “Fluctuating robustness of nominal phrases in Nuuchahnulth.” 15th International Pragmatics Conference. Belfast, Northern Ireland.
3. 中山俊秀. 2017.「言語知識はどのような形をしているのか」日本認知言語学会第 18 回全国大会. 大阪大学.
4. 堀内ふみ野,中山俊秀. 2017.「会話から見る文法体系の多重性：日本語の日常会話を例にして」第 6 回動的語用論研究会. 京都工芸繊維大学.
5. 中山俊秀. 2017.「会話に見られる言語表現の文法的特異性」日本英語学会第 35 回大会. 東北大学.
6. 中山俊秀. 2016.「複雑系としての言語の特性」情報資源利用研究センターワークショップ『複雑系としての社会システム研究の可能性を考える』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
7. Toshihide Nakayama. 2016. “Noun Phrases in Discourse: Why and how might they be interesting.” International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction. 慶應義塾大学.
8. Toshihide Nakayama. 2016. “Noun Phrases in Nuuchahnulth: Their place in grammar and discourse.” International Symposium on the Noun Phrase as Units of Linguistic Structure and Interaction. 慶應義塾大学.
9. 中山俊秀. 2016.「話しことばが新たに拓く文法研究を考える」『ことば・認知・インタラクション4』東京工科大学.
10. Toshihide Nakayama. 2016. “Observations on revitalization in Nuuchahnulth and Miyako communities.” Documentary Linguistics: Asian Perspectives. The University of Hong Kong.
11. Toshihide Nakayama. 2016. “Emergent units in speaking for interacting.” International symposium on the emergence of units in social interaction. University of Helsinki.
12. 中山俊秀. 2016.「コミュニケーションの中での文法を捉える」琉球諸語研究会. 九州大学.
13. Toshihide Nakayama. 2016. “Rethinking linguistic communication and grammar.” Invited Lecture. RILCA. Mahidol University.
14. Toshihide Nakayama. 2016. “Rethinking grammar: Multiplicity in grammar.” Invited Lecture. RILCA. Mahidol University.
15. 中山俊秀. 2016.「言語使用を基盤とした文法とその研究の方向性と可能性を考える」第 56 回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会. 国立情報学研究所.
16. Toshihide Nakayama. 2016. “Introduction to Language Documentation and Revitalization.” Invited Lecture. RILCA. Mahidol University.
17. Toshihide Nakayama. 2016. “Working with Conversational Data.” Invited Lecture. RILCA. Mahidol University.
18. Toshihide Nakayama. 2016. “On the Question of Universality of Lexical Categories: What Nuuchahnulth (Nootka) Can Tell Us.” Invited Lecture. Nanyang Technological University.
19. 中山俊秀. 2016.「会話に見る「また」の用法 ―コミュニケーションの特性に応じた構文

の発達―」社会言語科学会第 39 回大会．杏林大学.

20. Tsuyoshi Ono, Toshihide Nakayama & Ryoko Suzuki. 2015. “Fixedness and unithood in Miyako and Japanese conversation: An exploration into the emergence of structure and interaction.” 14th International Pragmatics Conference. Antwerp, Belgium.

21. 中山俊秀. 2015.「データと理論：データあっての理論か、理論あってのデータか」 フィールドサイエンスコロキアム．東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所.

６．研究組織

(1)研究代表者

中山　俊秀（Toshihide Nakayama）
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：70334448

(2)研究分担者

中山　久美子（Kumiko Nakayama）
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：40401426